

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32639

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13064

研究課題名（和文）脱占領期のメディアにおける文学者の美術言説と海外体験に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on Literary Authors' Art Discourses and Experiences abroad in Media in the Post-occupation Period

研究代表者

鈴木 美穂（SUZUKI, Miho）

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：40547915

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア・太平洋戦争後のポスト占領期に状況が激変した西洋文化受容の問題に関して、海外体験を基に文化の発信源となった文学者による美術言説に焦点をあて、新聞・雑誌メディアにおける美術言説および文学者の活動を実証的に調査・整理・検討・分析することで、西欧文化受容の実相解明を行った。それにより、戦後文化生成過程解明の端緒を開くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義・社会的意義については、第一に戦後の作家の海外体験と文学の関係を示した点、第二に戦後の新聞・雑誌メディアにおける作家の文化発信という視点を提示した点、第三に戦後文化生成過程解明の端緒を開いた点、第四に批評研究の可能性を示した点にある。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates the problem of acceptance of Western culture, which changed drastically during the post-occupation period. Focusing on the art discourses of literary authors who experienced abroad and became the source of culture, I investigated, organized, examined, and analyzed the art discourses in the newspapers and magazines in which they were active, as well as their activities, to elucidate the substance of the acceptance of Western culture. Through these activities, I aimed to build a research platform for elucidating the process of postwar cultural formation.

研究分野：日本近代文学

キーワード：文学 作家の海外体験 西洋文化受容 美術 ポスト占領期 メディア トラベルライティング 批評

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

アジア・太平洋戦争敗戦後の1945～50年代研究は、現在に直結する、戦後、構築された体制の様々な面を考える上でも重要な研究課題と言える。戦後文学の研究状況は近年占領期を中心に大きく進展しているが、ポスト占領後は未解明の部分も多い。

特に日本近代文学研究において「批評」研究は周縁に置かれ、戦後文学・文化の生成上、重要な役割を果たしたジャンルにもかかわらず、独立したジャンルとして扱われる機会は少ないのが現状である。

また西洋美術受容および戦後文化の形成期における文学者の美術批評や海外体験記の検証・分析は、これまで戦前に集中し、戦後については進んでいない。このような美術批評研究、批評研究の現状は、日本のみならず、海外でも同様である。

以上のような研究背景のもと、研究代表者鈴木はこれまで、小林秀雄が戦後集中的に取り組んだ非言語芸術を対象とする批評研究に従事する中で、「文学と美術」のクロスジャンルの研究、また、日本の戦後文化生成における批評研究の重要性に注目し、研究を続けてきた。

その研究過程で、文学者の美術言説は現地体験したという裏付けが渡航制限の継続する中で重要視されていること、海外体験は新聞社の「海外特派員」としてなされていること、さらに海外特派員としての文学者の発信が派遣元の新聞紙上以外にも複数の媒体においてなされていることから、メディアの分析対象を、新聞・雑誌に広げ、その実態を調査・検討する必要性を認識するに至った。

本研究課題は、これまでの研究成果の積み重ねによって着想に至ったものである。

2. 研究の目的

本研究は「アジア・太平洋戦争後に状況が激変した戦後文化生成期・ポスト占領期の渡航制限下で、海外体験を経た文学者の美術言説がどのように志向され、機能してきたか？」という問いを通じて、この時期の西洋文化受容の問題を、文学者による美術言説に焦点をあてて具体的に調査・検討・究明することを目的としてきた。

戦後の西洋文化受容に大きな役割を果たした文学者の美術言説（批評・随筆等）という、文学と美術のクロスジャンルの対象を、その受容の場となった新聞・雑誌メディアに着目し、制度や同時代言説等の状況にも目配りしつつ、テキストを具体的・実証的に検討すること、また海外体験に基づく批評等の言説を独立したテキストとして分析対象とすることにより、戦後文化生成過程の一端を解明し、研究基盤を構築することを目指してきた。

とりわけ、文学者による美術批評に焦点をあて、美術・文学雑誌、総合雑誌の試みを検証することにより、これまでの美術史研究・文学研究の枠組みでは注目されてこなかった「文学者による美術批評」テキストそのものを俎上にのせ、検証することを目指してきた。

また併せてその発表媒体とされた雑誌メディアを調査・検証することによって、文学者による美術批評がどのように機能したかを解き明かし、その意義を検討することで、戦後文化生成の過程解明の基盤構築を目指してきた。

3. 研究の方法

本研究はアジア・太平洋戦争後、西洋文化受容のあり方が激変する一方、渡航制限が継続する中で大きな役割を果たした文学者による美術言説に焦点をあて、西洋文化受容の内実を解明し、

戦後文化の生成過程解明へと展開するための研究の足掛かりを構築することを目指して、その受容の場となった新聞・雑誌に着目し、美術ジャーナリズム・美術行政等の文化状況に目配りしつつ、テキストを具体的・実証的に検討することで、戦後文化生成過程の一端を解明する方法をとってきた。

具体的には、以下の(1)(2)の研究項目により、段階的、多角的に進めてきた。

(1)戦後脱占領期の渡航制限継続下における新聞社の文学者海外特派員派遣の戦略と内実の解明

ポスト占領期を中心とする(1950年代)の各新聞・雑誌における美術言説調査・整理、またそれに基づく、文学者の海外特派員派遣体制・実態の調査

各新聞・雑誌掲載の美術言説の傾向の検証・分析および戦略の解明

(2)文学者による美術言説の実証的検証・分析

文学者の海外体験および関連する美術言説(批評・随筆等)の調査・整理

文学者による海外体験・美術言説の検証・分析及び同時代的意義の解明

以上の方法により、渡航制限下での海外体験を経た、文学者の美術言説の調査・検討を通じ、

各メディアの特色と文学者の美術言説がどのように志向・要請され、機能したかを明らかにし、戦後文化の生成過程解明の基盤とすることを目標として、分析・検討を進めた。

また「美術批評」の諸テキストを、文学作品として扱うことによって、テキスト分析を可能とし、それが戦後社会・文化の形成や美術界、文学界の状況とどのような関係性を持っているか、同時代の文脈における分析を進めた。

方法論としては、文学理論、美術史学の作品研究、メディア研究を総合的・統合的に用いて分析・検討を進めた。

4. 研究成果

既に述べたように本研究は、戦後文化生成過程解明の研究基盤の構築を目指して、ポスト占領期に状況が激変した西洋文化受容の問題を、海外体験を経て文化の発信源となった文学者による美術言説に焦点をあてて、調査・検討し、実相を究明することを目的としてきた。

具体的には以下の2項目によって、当該期の文学者における西洋文化受容の内実解明を目指してきた。

- (1) 各新聞・雑誌における美術言説調査・整理、それに基づく文学者の海外特派員派遣体制・実態の調査・検証・分析
- (2) 文学者による海外体験・美術言説の調査・検証・分析

初年度にあたる2019年度は、研究を進めていくための初期段階での準備態勢を整えること、また、実際に、文学者による海外体験と美術言説を検証する基盤として、渡航制限継続下での海外体験における受容の現場に関する調査に着手することであった。

国内・国外（フランス）の複数の図書館・資料室を利用し、1950年代の各新聞・雑誌における美術言説と新聞社海外特派員としての活動、文学者の海外体験・美術言説についての情報・資料調査・収集を行い、整理を進めた。

さらに、文学者の美術言説から西洋文化受容を検証するにあたり、文学者の海外体験の実際について、小林秀雄らを中心とした1950年代のフランス体験の現地調査を進めた。

その一部、小林秀雄のパリでの美術体験について、渡航制限下での海外での実地体験発信の意味と意義の検討は、「見る ことと 語る ことのあいだ 小林秀雄「近代絵画」初出冒頭を読む」(『日本文学』2020年2月)として発表した。

二年目にあたる2020年度以降は、2020年3月以来のCOVID-19パンデミックの影響により、長らく国内外における研究調査、フィールドワークが制限されることとなった。

可能な手段での図書資料、複写資料の収集と分析に努めたものの、国内外大学図書館・調査機関の利用制限が続き、文献調査も先送りせざるを得ず、作業は大幅に遅れた。予定の国外調査も見送らざるを得なかった。そのような事情から、本研究は一年間研究期間の延長を申請して取り組むこととなった。

三年目・四年目の2021・2022年度の最終年度まで、パンデミックによる調査・行動の制限が続いたが、海外体験・美術言説についての情報・資料調査・収集を可能な方法の範囲で継続し、またそれに基づく文学者の海外体験・美術言説の検証・分析を進めた。限界はありながらも再開している国内図書館・資料室へ研究調査に赴き、資料収集を部分的に行うことができた。これまでの調査を基盤に、文学者の海外体験と美術言説の具体的な検証を優先しながら研究を進めた。また段階的に再開されていった学会、研究会を通じ、さらに学会運営に関わることで、本研究に関連する占領期からポスト占領期にかけての知見を深めることに努めた。

一年目に進めた1950年代の各新聞・雑誌における美術言説と新聞社海外特派員としての活動と文学者の海外体験・美術言説についての情報・資料調査・収集、整理を進め、それらに基づく文学者の海外体験の検証を進めた。

その一部、小林秀雄のパリでの美術体験に関する現段階までの検討結果報告を「小林秀雄のパリ体験と批評」として口頭発表し(玉川大学学術研究所人文科学研究センター2020年度第2回公開研究会、2021年1月15日)、また1950年代の小林秀雄と1930年代の横光利一のパリ美術体験を比較・検討し、「横光利一と小林秀雄の観たセザンヌ パリ体験の翻訳」として論文発表し、海外体験と文学の関係の実相の一端を明らかにした(『横光利一研究』2021年3月)。また小林秀雄の批評活動を思想史の中で捉えることを目指した研究書(綾目広治『小林秀雄 思想史のなかの批評』)の紹介を『日本近代文学』第105集に掲載した(日本近代文学会、2021年11月)。なお最終年度までに公表できなかった成果は2024年度中に発表予定である。

実施できた国内外の調査を基盤に、文学者の海外特派員体制・実態の調査とともに分析を進め、美術批評に即して、美術(体験)の記述行為および美術受容における言語表現の機能の検討を主に進めたが、さらに、戦後の転換期の同時代の内外の文学・美術の動向との連動、また行政・制度の転換、メディアの拡大の中での文学活動などを総合的な視点で検証する、未開拓の、また想

定以上の規模の調査・検討・分析の必要性も認識するに至った。パンデミックによる制限が解かれ、調査が再び可能となる資料へのアクセスも含め、今後も本研究課題を発展させた課題に継続的に従事していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木美穂	4. 巻 第105集
2. 論文標題 「綾目広治著『小林秀雄 思想史のなかの批評』」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本近代文学』	6. 最初と最後の頁 180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19018/nihonkindaibungaku.105.0_180	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美穂	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「横光利一と小林秀雄の観たセザンヌーパリ体験の 翻訳 ー」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『横光利一研究』	6. 最初と最後の頁 152-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20822/yokomitsuriichi.2021.19_152	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木美穂	4. 巻 69
2. 論文標題 「見る ことと 語る ことのあいだ 小林秀雄「近代絵画」初出冒頭を読む 」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本文学』	6. 最初と最後の頁 72 - 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木美穂
2. 発表標題 「小林秀雄のバリ体験と批評」
3. 学会等名 玉川大学学術研究所人文科学研究センター2020年度第2回公開研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------